



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	座長解題《問題提起》（1991年度秋期大会シンポジウム「北海道農業の担い手問題」）
Author(s)	太田原, 高昭
Citation	北海道農業経済研究, 2(2), 1-2
Issue Date	1993-03-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62884
Type	journal article
File Information	KJ00009064861.pdf



共通論題「北海道農業の担い手問題」

座長解題《問題提起》

太田原 高 昭*

北海道農業はこのところ好調である。自由化攻勢と保護政策の後退の中で衰退局面に入ってきている日本農業の中であって、過去2年連続で史上最高の生産高をあげた北海道農業の健闘振りはひととき目立っている。今年も、自由化の影響で畜産部門にかげりがみられるものの、耕種部門は、野菜の高値に恵まれるなど引き続き順調に推移している。

しかし、その中で、将来展望として最も心配されているのが、農業の担い手に関する問題である。10万戸を割った農家戸数はその後も減少を続けており、土地余り現象に悩まされる地域もみられるようになった。残っている農家も、後継者を確保しているケースが意外に少ないことが明らかとなり、配偶者の問題も相変わらず深刻である。躍進する野菜・花卉の集約部門でも、雇用労働力の不足が黄信号を灯している。

長期的な趨勢でみると、これまで日本農業の生産力を支えてきたのは昭和一けた世代であると言われている。北海道ではそれに続く世代も厚い層をなしているが、昭和一けた世代が農業労働力構成の主力であったことには変わりがない。1990年代は、この世代がリタイアする時期である。その後はどうなるのだろうか。ここに自由化問題よりもおそろしい構造問題が存在するのである。

このシンポジウムの課題は、この担い手問題を、

北海道農業の現実 に即して解明し、それへの対応の方向を明らかにすることである。これはまさに現状分析としての基本問題であり、容易に回答が出て来るとは思えない。課題への接近方法も様々な切り口が考えられる。ここでは、現状認識を出来るだけ深めると共に、将来展望のいとぐちの発見に努める問題解決型の分析を基調として、第一線で活躍しておられる3人の方にご報告をお願いすることにした。

第一報告の仁平さんには、90年センサスの分析を中心として、統計的に把握し得る限りでの現状認識をご報告願いたい。90年センサスの結果は、これまでも指摘されてきた諸傾向を明確に示していると同時に、いくつかの新しい問題を提起していると思われる。担い手問題の構造的な性格を明らかにすると共に、昭和一けたに続く世代の状況、市町村レベルの動向の中で将来につながる動きなどにも注目していただければ、と思っている。

第二報告の黒沢さんには、北海道農政における「地域農業のガイドポスト」の考え方と、その実施過程での認識の深まりについてご報告をいただく。「地域農業のガイドポスト」は早くから農業の担い手不足を想定し、そうした条件の下での積極的な地域農業振興を、集落営農システムという手法で実現しようとするものであった。そうした考え方が、実際の進行過程で有効であったかどうか

*北海道大学

か、新たに生じている問題点は何かなどについての解明を期待している。

第三報告の富田さんには、北海道農業の新しいホープと目されながら、労働力不足の影響を最も深刻に受けている野菜生産についてご報告いただく。伸長著しい野菜作も、ここにきて不安材料が増し、北海道農業はやはり省力的な土地利用型でいくべきだという悲観論も出ている。野菜作はすでに北海道農業の柱の一つに成長しており、むしろ野菜作そのものを北海道らしい省力型に切り替えることが課題であると思われるが、そうした努力がどこまで進んでいるのか、技術的な視点も含めてご報告をお願いしたい。

コメンターには永木さん、市川さん、長尾さんの3人をお願いした。それぞれの報告に対応したコメントだけでなく、問題全体を見渡したひろい視野からの問題提起をいただけることを期待している。また、フロアからも積極的なご発言をいただいて、北海道農業の進むべき道がほの見えるようなシンポジウムとなることを、座長として強く念願している。